

森村泰昌アーカイブ

平成28年度 活動報告

名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる、本学出身の現代芸術家・森村泰昌に関する文献資料のデータベースの構築・活用方法を検討し、各資料が書かれた当時の文化的背景を考察することが目的である。日本の現代美術を代表する一人として、国際的に活躍を続ける美術作家、森村泰昌関連のO氏所蔵文献資料の現物にあたることによって、周囲の記事や当時の文化的背景などについても合わせて検討を進め、考察してきた。

O氏の資料収集の方法には特徴があり、森村に関する記事の掲載箇所のみを切り抜くのではなく、資料の本体をまるごと保管するという方針に基づいている。その時同時に掲載されていた他の記事内容や、デザインなどからも時代背景を知ることができ、関連記事だけではわからない様々な情報を読み取ることが可能になる。また、後に編集される図録や作品集などにはほとんど出てこないような作品についても、同時代の記事にはしきりに取り上げられている場合も多く、森村研究にとって貴重な資料体である。

現在、森村泰昌に関するO氏所蔵の文献資料のうち、1980年代から2000年までの雑誌、展覧会図録、パンフレット、新聞記事など(自筆、対談、インタビュー、他筆含む)約3000件について、整理を進め、作品タイトルや展覧会名でも関連記事が検索できるようにと電子化を進めてきた。研究者向けのデジタル・アーカイブの試用版を作成し、実際に検索してみることで更なる改良を目指し、またデータの充実にもつとめている。前期はテーマ演習として大学の授業の中に組み込み、毎週木曜日の午後に集まって、本年度は主に2000年までのファイルに入った新聞やチラシ類のデータをシートにまとめ、入力したデータと実物やファイルのコピーなどとの照合を進めた。また、それと並行してこうした文献資料アーカイブをどのように活用しているかの実例を見学したり意見交換をするために、美術館やギャラリーを訪ね、討論を重ねた。2016年4月5日から6月19日にかけて国立国際美術館で開催された「森村泰昌:自画像の美術史-「私」と「わたし」が会うとき」展ならびに名村造船所跡地にて開催された NAMURA ART MEETING '04 - '34 vol.05「臨界の芸術論 II - 10年の趣意書」森村泰昌アナザーミュージアム&アーカイブルームには繰り返し足を運び、見学会を実施。作品とアーカイブの関係、その活用の重要性などを実地に学ぶと共に、討論を重ねて更なる意味の探求を行った。後期は蓄積された文字データの修正と追加入力を行ない、デジタル・アーカイブの設計構築にとりかかり、見やすく使いやすい検索システムの試験的運用の実施に向けて準備を進めてきた。データベース試用版は2017年春より芸術資源研究センターにて公開し、更なる活用に向けて検討を加える予定である。

加須屋 明子(美術学部教授)